

地金論争におけるハスキッソンの立場

——紙幣減価の一考察——

峰 本 暁 子

は し が き

地金論争の文献を渉獵することは、時には暗中模索の感がある。一般に知られている地金論争の内容は、一七九七年のイギリス銀行制限法をめぐって展開された地金主義、反地金主義の通貨論争であって、当時のイギリスの銀行券の過剰、物価騰貴、地金の高値、為替相場の下落という問題の因果関係を究明することであったと知られている。しかしながら、深く立入って、それぞれの著者の主張を検討して見ると、何を問題としたのか、どちらの側の原理を強く主張したかは、同じ主義者と分類されている人々のそれぞれが異なっていて、一概に一方の主義者であると断定出来ない場合も多い。

物価指数の無知、統計資料の不充分さの中にあって、理論を形成したものは、事実になどい、事実を知るもの

地金論争におけるハスキッソンの立場

地金論争におけるハスキッソンの立場

は、理論の構成力に欠けて、種々雑多の意見を続出したのであって、地金論争を単に貨幣数量説の信奉者と批判者の二つに分けて考えるのは、あまりに単純である。

本稿においては、ハスキッソン⁽¹⁾ (W. Huskisson) の著書「わが国通貨の減価問題に関する所見と吟味」(The Question concerning the depreciation of our Currency stated and examined, London, 1810.) を中心にして、地金論争の焦点と云われている減価の問題を取り上げて見たが、ここにも明らかに、以上のことが伺われる。さらに、ハスキッソンの著書に興味をひかれる点をあげれば、

一、ハスキッソンは、地金委員会の有力メンバーであるホオナー (Francis Horner) と共に、地金報告書の起草に加わったにもかかわらず、しばしば地金報告書と意見を異にしたと思われる点があったこと。

二、「紙券減価」の理論的著書としては、本書は、一般側の代表であるリカドオ (David Ricardo) の主張と相前後して、地金委員側の代表として世に出たこと。

三、地金報告への反論者として、最初の人といわれたシンクレヤー (J. Sinclair) は、ハスキッソンを先づ攻撃目標として批判したこと。

四、穩健な地金論者といわれたマルサス (T. R. Malthus) も、リカドオに対するのと幾分異なった批判を、ハスキッソンの減価論にむけたこと。

等である。

紙幣の減価論に関しては、一八〇一年にすでに、ボイド (Walter Boyd) がそれについての小冊子⁽²⁾を發表して居り、一般にはボイドを通じて広く理解されているので、なるべく陳腐になりがちな減価論はさけて、問題を整

理していくことにしたい。従って、この小稿では、第一に、ハスキッソンの地金主義的主張とは、いかなるものであったか、第二に、リカフドオの主張といかなる点で異なるか、第三に、減価論の本来の目的は何であったか、この三点について考察して見たいと思う。

- (1) ハスキッソン (William Huskisson, 1770—1830.) は、少年時代をフランスで送り、二十一才のとき帰国し、後ウイリアム・ピット (William Pitt) にその才幹を認められ、ピットの戦時秘書官として官界に入った。一七九六年初めて下院議員に選出され、一八〇四年、ピットが再び内閣を組織するや国庫院の秘書官となり、財政上の見識を養う機会を得た。さらに一八〇八年、国庫とイングランド銀行との交渉にあたってその財政的手腕を発揮して、この方面の第一人者と注目されるようになり、一八一〇年地金委員会の委員となり、委員会においては時にはホオナー (Erasmus Horner) に代って委員長として活躍し、ホオナーと分担して地金報告書の起草の任に当った。当時、委員会の結論に反対するものの多いのを知って、*“The Question concerning the Depreciation of our Currency stated and examined”*, 1810. を公表した。本書は、一八一一年中に、第七版を出し、地金派の主張を知る重要な文献とみとめられた。その後一八二二年には、リヴァプール内閣の商務大臣となり、カニング (Canning) の支持を得て関税改革を行い、イギリス自由貿易制度確立の第一歩を築きあげた。彼は理論と實際とを兼ねそなえた大政治家の一人であったが、そのまれなる才能に比して成功する所少なかった。それは、彼が終生カニングに私淑して、独立の機会をもち得なかったためといわれている。Dictionary of National Biography, pp. 323—328.

- (2) Walter Boyd, *A letter to the Rt. Hon. Wm. Pitt, on the influence of the stoppage of issues in specie at the Bank of England; on the prices of provisions, and other commodities*, 1st. ed., London, 1801.

一

ハスキッソンによれば「本質的、内在的価値を有するのが貨幣の本質である」⁽¹⁾という。貨幣という語のさまざまな定義、数多くの理解が十九世紀初期のイギリス通貨事情に、多くの問題と疑問を投げかけたともいえよう。ある人は貨幣を、あらゆる商品の代表物であると定義し、ある時は貨幣は、それら商品の共通尺度であると定義された。しかし、ハスキッソンは、商品を代表する性質は必ずしも内在的価値をいみしていない。その特質は、信頼とか權威によってあたえられるかもしれないからである。又、共通尺度であるという特質も、必ずしも内在的価値を意味せず、われわれが計ることの出来るものは、何でもかくとくするという力を意味するだけである。金あるいは銀の一定量である貨幣は、共通尺度とか、又他の財の共通の代表物であるのみならず、共通な、普遍的同等物であるという。

貴金属貨幣と対照して、ハスキッソンは「紙幣通貨は、明らかに何ら内在的価値を有していない」⁽²⁾とし、また「一国の貨幣あるいは一国の鑄貨は、一国の資本であるのに、紙幣通貨は一国の資本の一部ではない」⁽³⁾と述べている。ハスキッソンによれば、紙幣通貨は流通信用それだけである。従って貨幣は商品の価値の普遍的な同等物であるが、紙幣通貨は貨幣の代表物であるとした。又、紙幣通貨を二つに分けて、「一つは、信用にもとづくものであり、他は、權威にもとづくものであるとし、信用にもとづく紙幣はわれわれが流通信用としてえがたい

ものであり、又、ある特定の貨幣を要求あり次第支払うという契約で成立っている」この契約は、かかる紙幣が社会の取引の中で貨幣に代替され得るという、かかる紙幣の発行者に対する一般的信用から生ずる。一方、権威にもとづく紙幣とは、一般用語で、ペーパーマネー（Paper Money）とよばれている所のものである。認可の下に発行され、流通されるという約束より成るもので、国家の公けな権力によって直ちに干渉されるであろう。「イングランド銀行制限前に、大英帝国で流通していた紙幣は、げんみつな意味では流通信用であつた。」⁽⁵⁾

又、ハスキッソンによれば、「価格は、ある一定の商品の価値を通貨で表わしたものである」⁽⁶⁾従つて、一国の通貨が金より成ると仮定した場合、もしも、かかる国の金の量がある一定の割合で増大されたならば、他の財貨の量ならびにそれらに対する需要は同じとして、ある一定商品の価値は増大されるであろうし、金の他の商品に対する相対的価値は同じ割合で減価されるであろう。勿論、鑄貨の称呼や標準は、不変のまま残るであろう。この標準とは、それぞれの名称に対して、法律によって定められた正確な量であると説明した。

以上のような、ハスキッソンの貨幣本質論に対して、地金論者批判の急先峰として知られるジョン・シンクレヤ（J. Sinclair）は、ハスキッソンの金属主義的な考え方を鋭く批判した。⁽⁷⁾

例えば、ハスキッソンが「必要な知識は、過去のわが国通貨史を辿ることによつて、又政治経済学の最高権威として尊敬されている人々に、われわれ自身の言葉で助けを求めることによつて、易く得られる」⁽⁸⁾とのべている点を先づ衡いて「現在の進歩した経験を過去の権威者の判断で説明しようとしている所に、ハスキッソンの間違いのすべてがある。」「昔の人に頼るより学識広いといわれる現代の方々の方が、貴重な広い知識をあたえてくれるであろう」と、個人的感情と思われるほどの皮肉から、シンクレヤの批判は始まっている。

地金論争におけるハスキッソンの立場

しかし、こうしたシンクレヤーの見方は、幾分早計であつて、ハスキッソンも後節において、例えばウィリアム・ブレエク (W. Blake) の著書¹⁰⁰を讚美しながらもリカアドオの批判¹⁰¹と異なる彼独自の説明をなしている。¹⁰²その点については本稿後節でふれることにしよう。

貨幣の本質論にたちかえつて、シンクレヤーの説明に耳を傾けて見ると、真正価値をもつのが貨幣の本質であるという前述のハスキッソンの意見に対して、「しかし、もしもハスキッソンが素材的な真正価値のない多くの財貨も、貨幣として通用して来たという事実を知らなければ、彼の本質論は浅慮である。」¹⁰³また、紙幣通貨は明らかに、何ら真実の価値をもっていないというハスキッソンの意見に対して、シンクレヤーは、「鑄貨は単なる交換手段、あるいは輸送手段にすぎないのに、紙幣通貨は同じ目的を果しながら、ずっと便利な性質をもっているという事実をみのがして紙幣を説明しようとするハスキッソンからは、通貨や紙幣についての知的な判断を期待出来ない¹⁰⁴」とさえのべている。

こうした二人の言い分は、貨幣に対する金属主義、名目主義の立場からクナップ (G.F. Knapp) の固定字説の出現以来、はつきりした形をとつて争われて来た論争であつて、ここでは深く立ち入る必要はないと思う。そうした両者の言い分の是非は、事実と歴史の推移が証明するもので、紙幣本位制の現代から見れば、貨幣構造の変遷を知らぬ争にすぎない。しかし地金主義、反地金主義の立場は、そうした貨幣本質論の相異から出発していることを、今改めて認識すると共に、それでもなお、両者の言い分を事実¹⁰⁵に照して究明せざるを得ない所に、地金論争研究の意義があるのであらう。

さて、シンクレヤーは、さらにつづけて、ハスキッソンの、貨幣または鑄貨は、一国の資本と同じであるという

言葉に対し、ハスキッソンに於て、貨幣と鑄貨は同義語に考えられていることを指摘し、「一国の流通通貨は、資本の一部として考えられるという考えに關しては全く納得出来ない。一国の鑄貨あるいは正貨は、消費資本、固定資本、あるいは自由資本のどの部分も形成しない。それは何も生産しない流通資本に含まれる。一国の鑄貨は、その国の道路にたとえられるもので、道路は通貨と同じく何も生産しないが、ただ一国の富の間接的なものであり、又一国の富を得る手段である」と、スミスの考え方を引用している。しかし、ハスキッソンが、貨幣は一国の資本であるとのべたのは、貨幣資本ないしは流通資本を意味したのであって、あえて資本の一語に拘泥して、スミスの古典を引用したシンクレヤーは、自分の批判した前述の「古人に従う」という穴に自己をおとめている感がある。問題は、むしろ、ハスキッソンの「紙幣通貨は一国の資本の一部ではない」とのべている点に存するであろう。

シンクレヤーの批判に比べて、マルサス (T. R. Malthus) の批判は、ハスキッソンに対してかなり弁護的である。マルサスに言わせれば「貴金属は、ハスキッソンの意見のように普遍的同等物としてよりも、交換価値の尺度として、より重要な役割を果たしている」とのべ、「ハスキッソンの説明は、以上のような小さな基本的不正確さにもかかわらず、概して全く健全で満足すべきものである。さらに、彼の著者の一二頁から一七頁までのわが国通貨の實際的減価の証拠の説明ほど、明白な、納得の行く説明はない」とさえいつて、ハスキッソンに対してはリカアドオに対するほどきびしく批判していない点を考慮すると、地金論者として中庸をえたマルサスからみたりカアドオとハスキッソンの相異が伺われる。

(c) W. Huskisson, *Ibid.*, p. 1.

地金論争におけるハスキッソンの立場

與金銀の相対的価値の増減

- (2) W. Huskisson, *Ibid.*, p. 2.
- (3) W. Huskisson, *Ibid.*, p. 2.
- (4) W. Huskisson, *Ibid.*, p. 3.
- (5) W. Huskisson, *Ibid.*, p. 3.
- (6) W. Huskisson, *Ibid.*, p. 4.
- (7) J. Sinclair, *Observation on the Report of the Bullion Report*, 1810. この小冊子は、一八一〇年九月初めに刊行された。著者は、金銀貨の価値の増減の最初の著者であるといわれる。
- (8) W. Huskisson, *Ibid.*, Preface, p. xiii.
- (9) John Sinclair, *Remarks on a Pamphlet intitled, "The Question concerning the Depreciation of the Currency Stated and Examined" by William Huskisson*, London, 1810.
- (10) William Blake, *Observations on the Principles which regulate the Course of Exchange, and on the present depreciated state of our currency*, London, 1810.
「この著者の『金貨の価値の減低』は、著者がいふところから、その言葉が書かれた為替理論の中で、最も完全な説明である。」 W. Huskisson, *Ibid.*, Preface, xiii.
- (11) David Ricardo, *Reply to Bosanquet*, Works, Vol. III, pp. 209—10.
リカードの『金貨の価値の減低』は、著者がいふところから、本稿第三節参照。
- (12) W. Huskisson, *Ibid.*, p. 27.
- (13) J. Sinclair, *Ibid.*, p. 43.
- (14) J. Sinclair, *Ibid.*, p. 44.

⑨ J. Sinclair, *Ibid.*, p. 45.

⑩ T. R. Malthus, *Edinburgh Review*, Feb. 1811, in *Occasional Papers of T. R. Malthus* by Bernard Semmel, N. Y. 1963, p. 85.

一一

ハスキッソンは、その序文で、もしも、「一国の通貨の一部が減価されれば、その通貨全体は紙幣であれ、金であれ、等しく減価されるにちがいない。これは、この後の諸頁で私が展開したものである」⁽¹⁾と述べているように、貨幣の一般論をのべた後、殆ど全頁にわたって、一八一〇年代に通貨が減価されたということ、イングラント銀行側の反対意見に対する批判、減価と物価との関係、減価と外国為替との関係を、諸所混乱しながら説明している。

ともあれ、われわれは、ハスキッソンの減価論を整理しながら、彼の主張を理解して見よう。ハスキッソンは、現実の通貨減価を理解する道を次の順序で説明している。

「この国の法律によって、金の一ポンドあるいは十二オンスは、四四ギニー半あるいは、四六ポンド一四シリング六ペンスに分けられる。この分割は、公共費でなされ、鑄造手数料なしでなされるので、この分割によって金は金の価値に何もつけ加えられないし、又、金の価値から何もひかれない。すなわち、金一ポンドは、四六ポンド一四シリング六ペンスに等しい。一七九七年の法律の意図した施策は、流通信用と交換されるべき金の量を減

地金論争におけるハスキッソンの立場

地金論争におけるハスキッソンの立場

じることにならなかった。しかし、わが国現在の紙幣で四六ポンド一四シリング六ペンスの額は、金との交換で一〇・ $\frac{1}{4}$ オンスの金を得るであろう。ところが、一ポンドの金は、今や紙幣通貨で五六ポンドの紙幣通貨と交換される。それ故、金一ポンドに等しい商品は、紙幣五六ポンドにまた等しい。以上のことは、五六ポンドと四六ポンド一四シリング六ペンスの差異は、また、金一二オンスと一〇・ $\frac{1}{4}$ オンスとの間の差異は、紙幣の減価から生じているということになる。そして、この差異は、普遍的同等物である金に関して、他の商品に対しても同様に、減価の尺度である。⁽²⁾

さらに、ハスキッソンは、一国の通貨減価は二つの原因から生ずると説明している。「第一には、本位鑄貨が、その標準を形成するところの貴金屬を、法律によって保証された含有量より、少ない量しか含まない場合であり、第二は、その通貨量の増大によってである」⁽³⁾。最初の原因から生ずる大きな減価は、イギリスではウィリアム王治世 (King William's time) の時に生じた。その時、イギリスの鑄貨に實際に含まれた貴金屬の量は、平均して保証された含有量より約三〇％少なかったと云われる。しかし一七七三年の一般の改鑄以後には、減価の第一の事情は、イギリスに作用しなくなった。それ故一八一〇年の減価は、過剰によって生じたものにちがいないと、ハスキッソンは結論するのである。

たしかに、われわれが考え得る減価とは、一つは価格標準の引き下げによる銀行券の減価であり、他は物価騰貴と共に表われる銀行券の相対的価値の低下である。従って、第二の問題は、銀行券の過剰と結びついて考えられるが、ハスキッソンによれば、「一国のあらゆる物価の一般的騰貴は、その通貨の減価を示すものではなく、通貨の減価は貴金屬の増大によって必ずもたらされる」⁽⁴⁾とし、反地金論者の特有な弁護に対して「イングランド

銀行が確實安全な手形にその割引を限るといふ事情は、銀行券の量の過剰という問題と何の関係もない⁽⁵⁾と、質の規則が必ずしも量の制限にならないことを衡している。この点は、一見卓見であるが、量の制限のためには質の規制もインフレ抑制策として必要であることは、今更説明するまでもない今日の常識である。こんな所に、シンクレヤーの「ハスキッソンは、現代の常識を理解出来ないほど完全に、古い文献に没頭している」⁽⁶⁾という皮肉が生じてくるのであろう。

しかしハスキッソンは、すぐその後で、「もし一国の流通が、一部分は金から、一部分は紙から成立っている、しかもその流通額が紙幣部分の増加を通じて二倍になったならば、国内物価に対するその影響は、前の場合と同一であろう。」（すなわち物価は騰貴するであろう。）「しかし通貨増大のために、その国の金が世界の他の部分におけるよりも、より豊富となるようなことはない。なんとすれば、商品としての金の他の商品に対する相対的価値は、依然としてもとのままであるから。またその場合、商品としての金の価格は、他の商品のそれらと同じ割合で騰貴するであろう。たとえ称呼によつて規定されていて、金が専らこの法定の称呼に従つて通用するとしても。かくの如く、ある一国内で紙幣が増加される場合には、金貨の輸出が起るであろう。何故ならそれは、商品としての金とその国内で他の貨物よりもより豊富となり、従つてより小なる価値をもつに至るからではなくて、むしろその国の通貨で測つた金の価格があらゆる他の商品の価格と共通的に増加するにもかかわらず、通貨としての金のみが依然として従来のままであるといふ事情のためである」⁽⁷⁾とのべている。先の説明では物価の一般的騰貴と、貴金屬の増大との関連を別に考えているのに対し、ここでは、金の価格と他の物価の騰貴は、同じ割合で行われるとして彼の論理の矛盾を示している。しかし、この後者の考え方は、前述のウィリアム・ブレエク

に追隨したものであるといわれているものであるが、ブレエクの説明とはいく分異なる。すなわちブレエクは、「私の知るすべての経済学者は、為替相場が地金輸送費以上に平価からはなれた場合には、直ちに地金の移動が行われると確信しているように思われる。しかもこのような誤ちは、真実為替と名目為替との諸効果を十分に区別しないためから生じている」と。ブレエクは多くの頁を費して紙幣の流通量が増加される場合には、たとえ通貨の大部分が貴金属から成立っていたとしても、地金の価格は常に、他の商品と同じ割合で騰貴するであろう。また、外国為替は名目的に同じ程度で下落するのである。従って地金の輸出は何等の利益をも生じないであろうということを証明している。

これに対してリカアドオは、「わたくしは流通がまったく紙券からなっているとすれば、輸出される商品としての金の価値にたいする影響は、ブレエクやハスキッソンの、のべているとおりであると考える点において、これらの著者に全く同意する。しかし通貨が全然金属的であるか、又は一部分は金から、一部分は紙から成り立っている場合には、紙幣増加の結果として地金の価格が騰貴するようなことはない。もし一部分は金から、一部分は紙から成り立っている通貨が、紙幣部分の増加によって増加される場合には、通貨全体の価値は下落するであろう。いいかえれば、他の諸商品の価格は、これらを金貨で評価する場合も、または紙幣で評価する場合も共に騰貴するであろう。同一の商品は、紙幣増加後には、以前より多くのオンス数の金貨を購うであろう。何故ならば、その商品は前より多くの貨幣量と交換されるからである。しかるに、ブレエクやハスキッソンは、たとえ法律がそれを禁止していてもなお、鑄貨が地金に変化されるという事実については、少しもふれていない。しかもこのことによって、鑄貨としての金の価値と地金としての金の価値とが速かに歩み寄って完全に均等となる

のではあるまいか。もし紙幣発行の結果、商品が従来よりも多くの金貨に対して売れるならば、その商品はまたより多くの地金に対して売れるであろう。それゆえに、金地金と諸商品との相対価値が、紙幣増加後においても、以前と同一であるということは当を得たものでない⁽³⁾と。

この点は、ハスキッソンが地金主義の先駆者でありながら、通貨学派批判の一視角として、しばしば援用されるブレネクの実質的為替と名目的為替の区別を高く評価しながらも、なおブレネクとハスキッソンの意見を、金価格騰貴を混合流通のもとでみとめる点は、不十分なものとして批判したのであろう。

- (1) W. Huskisson, *Ibid.*, Preface, p. xxi.
- (2) W. Huskisson, *Ibid.*, pp. 12—13.
- (3) W. Huskisson, *Ibid.*, p. 25.
- (4) W. Huskisson, *Ibid.*, p. 25.
- (5) W. Huskisson, *Ibid.*, p. 34.
- (6) J. Sinclair, *Ibid.*, p. 42.
- (7) W. Huskisson, *Ibid.*, p. 27
- (8) W. Blake, *Ibid.*, p. 52
- (9) J. R. McCulloch, *The works of David Ricardo with a Notice of the Life and Writings of the author*, London, 1876. pp. 337—338.

三

地金委員会のメンバーであつたヘンリー・パーネル (Henry Parnell) は、地金報告に関する議会の討論で、リカアドオと同じく、イングランド銀行に対する敵意を表明した。しかしハスキッソンとホオナーは、パーネルの意見に同意しなかつたと云われている。⁽¹⁾ 果してそうであつたらうか。フェッター (F. W. Fetter) の指摘する如く、⁽²⁾ リカアドオの理論が、ホオナーや、ハスキッソンなど地金委員会のメンバーに影響をあたえなかつたということは真実であるかもしれない。

しかしながら、ハスキッソンは、各所で、イングランド銀行当局の行動を批判している。例えばハスキッソンは、イングランド銀行側の意見に対して、すなわち当時の金の高値は、銀行紙幣発行過剰に何の関連もないという人々の意見に対して、次のような疑問をなげかけた。

「第一に、銀行側は、金の高値の直接の、効果的原因是金の大きな不足と、大陸での、金に対する需要の増大であるというが、事実であらうか。第二に、銀行側は、金の購入に対して投機が行われて来たし、それが継続しているということを強調しているが事実であらうか。」⁽³⁾ 第一の金が大陸に於て非常に高いということは、ハスキッソンも認めている。彼の不審に思ふ点は、金が何との交換で高いのかということであつた。「減価された紙幣との交換で高いのであらうか。このことは大陸の二、三の場所ではありそうである。しかしこれは、われわれが関連すべき基準ではない。それでは、あらゆる他の商品との交換で高いのか。もし金で支払うなら、大陸では、

衣類、穀物、鉄その他の商品が安いのだろうか。もし、大陸でそうであるなら、金の不足は、イギリスにも同じ結果をもたらすよう充分長くつづかなかつたであらうか。果して、この二年間に、イギリスで物価が下つたろうか。明らかにこれは事実と「反対である」とのべている。このようなハスキッソンの考えは、マルサスも指摘しているように、それらの原因が減価の本質と何ら関係がないということであり、そのことはこの問題の考察にあつて大切な点ではなからうか。そしてマルサスは「過去数年間に大陸で、貴金屬の価値に何らかの騰貴があつたか、またそれがわが国通貨の現状に少しでも影響したかどうか、われわれには決定出来ないが、ハスキッソンが考へるほど否定的であると思へない」とのべている。⁽⁶⁾

そして、ハスキッソンはイングランド銀行理事たちの行為を責める手始めとして、金の価格決定から議論をすめてゐる。⁽⁶⁾「金に対する需要は、他の商品に対する需要のように消費に依存している。そしてその価格は需要によつて統制されている。銀行制限以前のイギリスの金の消費は、われわれ商工業者の目的のためと鑄貨用であつた。前者で使用される量は取るに足らないし、多分なお不変のままである。大きな需要は、金の通貨を維持するためのものであり、大口の買手はイングランド銀行であつた。ところが、この需要が全く止んでしまったのである。イングランド銀行の買は、過去二年間中止されなければならなかつた。わたくしが知っているこの事實は、証言にはない。この国の市場は、国内消費のために殆ど下落しなかつたが、大陸の市場は以前と同様活発であつた。金の輸出をさえぎる唯一の方法は、イングランド銀行が市場価格をあたえるということ、そして流通での金の使用を復活するということであつた。輸出用の金が、海外にもち出すことを法律で許されていない金より高い価値をもつということは、通貨の過剰がその相対的価値を減少した一方、金の用途がわが国通貨の現状によ

地金論争におけるハスキッソンの立場

って廃されたためであり、又、減少した価値に対して充分考慮しないイングランド銀行が、市場価格を提供しなかったためである。わたくしは、法律によって、輸出出来ない金の相当量が、過去二年間に、一部は鑄貨で、一部は延棒で、大陸に送られていたということは疑わない。しかし、もしも銀行理事たちが、彼等の紙幣価値が減価されたと同じ割合で、それらの価格をあげたならば、それらの金は、英国にとどまったであろう。」法律で輸出を禁じられている金について指摘した点は、ハスキッソンのすぐれた着眼点であり、たんに、銀行理事たちが、紙幣を過剰に発行せしめた点を非難する一般論とちがって、市場価格でそれらの金を買ひ上げなかった点を責めていることも、リカアドオと異なる点であろう。しかし銀行制限下で、それらの金を、たとえ余剰準備のためとしても、イングランド銀行が買ひ上げることが出来たかどうかの疑問が残されよう。

さらに、ハスキッソンは、「会社の利潤が銀行券発行量に比例し、それらの発行に何の考慮も払わず、ただ貸付の手形の性格しか考えないイングランド銀行は、その紙幣の発行を自然に継続的に増大する傾向をもつであろう。それ故、わが国の紙幣通貨の減価が、金地金の高値によっていちじるしくなる前の相当期間の間、イングランド銀行券の量は、過剰であったように思われる。しかし、イングランド銀行券の過剰発行の完全な影響は、それほど急速に感じられなかった。何故なら、わが国の通貨が、金と紙幣の混合で成り立っている限り、金は輸出され、溶解される。かくして徐々に紙幣増大の場をつくり、紙幣の価値は相当程度支持された。しかしイングランド銀行券や地方銀行券の継続的増大によって金の殆どが、流通からおし出され、紙幣のこのような増大が、わが国の通価価値を減少した。割引の増大に対する処置が、商業界をさわがせたこと、そして金の大部分が駆逐されたということの不幸な一致によって、さらにこれらの割引を有効とした機関が、わが国通貨の減価を促進する

のに貢献したのである。⁽⁵⁾ハスキッソンのこうした言葉は、リカアドオや他の地金委員の意見のように、単刀直入にイングランド銀行理事を責めるのと異なった、当時の必然的事情への理解が伺われる。この点、ハスキッソン自身、地金報告書の起草者でありながら、この書の序文にもあるように、彼の友人の幾人かを満足させるために、主として書かれたことからの彼自身の友人に対する遠慮であったか、あるいは真意であったかどうか決定するのは困難である。

- (1) Hansard, Second Series, vol. xix. 8 May, 1811, pp. 1046—7.
- (2) F. W. Fetter, The Bullion Report Re-examined, in Papers in English Monetary History, ed. by T. S. Ashton and R. S. Sayers, Oxford, 1953, p. 67.
- (3) W. Huskisson, Ibid., pp. 41—42.
- (4) W. Huskisson, Ibid., pp. 42—43.
- (5) T. R. Malthus, Ibid., pp. 86—88.
- (6) W. Huskisson, Ibid., pp. 90—91.
- (7) W. Huskisson, Ibid., p. 92.

四

次に、外国為替の問題が、当時のイギリス銓貨の標準と通貨の実際価値との間の相違を説明するのにどう役立ったか、ハスキッソンの説明にふれて見よう。ハスキッソンによれば、地金委員会の前に召喚されたあらゆる商地金論争におけるハスキッソンの立場

地金論争におけるハスキッソンの立場

人たちは、この点について地金報告書の説明と一致するとして、「為替の真の下落は、一定期間中、債権国から債権国へ、地金を輸送する費用を超過することはない」とのべている。大陸との為替相場が最も不利であった年に、実際の下落は、この額を越えなかったことが、当時の統計⁽¹⁾によってあきらかであるから、その結果、それらの為替の実質相場と名目相場の損失の相異は、何か他の原因に帰せられた筈であるというのである。

そして、さらに、ハスキッソンは、この問題に関する次の三つの誤った意見が、商業理論で一般にみとめられていることを批判した。第一に、一国にとって為替が不利である時はいつでも、貸借をなくす自然なコースとして地金での支払をなすということ。第二に、一国に順な国際収支は、終極的には、貿易差額とよばれるものによって、あるいは、輸入を上廻る輸出超過によって測定される。第三に、貿易差額は、非常に順調であるが、国際収支はその国に逆調である。すなわち、一国は、その地金を大量に輸出するであろうということである。ハスキッソンによれば、これらは、事実に反しているという。兌換紙幣下と同様、不換紙幣下でも、地金の価格は外国為替によって支配されるということ、兌換下にあつては、為替は、金輸出点以下に常に下がらないということとは、地金論者、反地金論者の双方で議論されてきた。しかしながら、反地金論者は、不換紙幣下にあつては、為替下落にこの制限は存在しなかったということ。為替と地金に対する打歩は、全く国際収支の差額によって左右されるということを主張した。この決定的な問題の取扱いにおいて、地金論者は、異なる意見をもつ二つのグループに分かれた。それら一つのグループは、ホイットレーイ(J. Wheatley)とリカアドオのたった二人のみであったといわれる。⁽³⁾ 外国送金は、不換紙幣下においては、外国為替を弱めるよう作用するであろうという議論に対して、ホイットレーイ、リカアドオの両者は、外国送金は、兌換下でも、不換紙幣下でも何ら影響を及ぼさない

であろうと。兌換下でも不換紙幣下でも、各々の生産物に対するイギリスとその他の世界の需要は、自動的に送金を調節するので、それらの需要は、相対価格や為替相場に何ら変化を起さずに、それらの財で移転されたいうことを主張した。それ故に、彼等によれば、もし紙幣本位下にあつて、スターリング為替の減価を生じたならば、このことは通貨の過剰発行の証であつたのである。しかしながら、他の地金論者たちは、中間の立場をとつた。すなわち、彼等は、外国送金は、為替相場に影響するだらうということを認め、かかる送金が行われている間、地金の打歩および為替の平価以下ということは、流通上の通貨量が金屬本位通貨制の下で維持される量を、超過しているという証にはならないことをもみとめていた。すなわち、ホイートレーイやリカアド以外の地金論者たちは、莫大な送金は為替を逆調ならしめたと考えていた。この点、ハスキッソンは、ホイートレーイ、リカアドオの考えに非常に類似するものである。しかし、彼等の見解は、後のシルバリング、(N.S. Silbering) エンジェル (W. Angell) ⁽⁴⁾ の説明によつて事実からはなれてゐることが証明されている。すなわち、シルバリングは、イギリスの外国送金と、イギリスの紙幣通貨の銀価格とを比較することによつて、又、エンジェルの場合は、銀に対する打歩と、ハンブルグ為替の比較によつて、これらの送金と、イギリス通貨の状態の密接な関係を示している。ただし、リカアドオは、後に、反地金論者からのみでなく、地金論者からの圧迫に幾分屈して、彼の主要な主張を放棄することなしに、莫大な送金が為替を下落させる傾向があるといふ点を譲歩した。⁽⁶⁾

しかしながら、反地金論者の考えもこの点必ずしも正解であつたといえないであらう。なぜなら、反地金論者は、不換紙幣下においては、為替は、外国為替の需給によつて全く決定されると主張したが、このことは金屬本

地金論争におけるハスキッソンの立場

位制下でも真実であり、なお、外国為替の相対的需給を決定する非常に重要な要因は、二国の相対的物価水準であり、それは、通貨の相対量によって大きく影響を受けることを、反地金論者の殆どが見のがし、外国為替の下落が、商品輸出余剰の必要なしに外国送金の支払を可能にしたと考えていたらしい。しかし、事実は、「減価した紙幣通貨の下では、国際収支は、当然不利で、逆調差額を決済する何の手段ももち合せていなかった時は、外国からの受取、外国への支払は、それゆえに、わが国の商品輸出の増大、輸入ならびに政府の外国支出の縮少等によって均衡にもたらさなければならぬ」と主張した反地金論者ヒル (John Hill) の説が正しかったといえよう。

ハスキッソンは、前述の主張に対して、貿易収支と国際収支の差を説明し、さらには、アイルランド通貨問題におけるアイルランド通貨委員会の報告書を引用して、自己の見解を弁護している。すなわち、アイルランド通貨問題の代弁者、ヘンリー・パーネルによれば、「アイルランドから、イギリスへの送金が外国為替相場不利の原因であるとしばしば一般に信じられているが、ロンドンからの借入の利子と、不在地主になされた送金とが、外国為替の高値の原因でありうるとか、通貨減価の理由であるということは出来ない」とのべている。この説明は、いつて見れば前述ハスキッソンの、為替の不利は必ずしも地金送金という形で表われないという自説の「すばらしい説明」でもあった。

(1) The evidence and calculations furnished to the Committee by Messrs. Grefulhe and Goldsmid, cited, in W. Huskisson, *Ibid.*, p. 48.

(2) W. Huskisson, *Ibid.*, pp. 48—49.

- (3) J. Viner, *Studies in the Theory of Intenational Trade*, 1937, p. 138.
- (4) N.S. Silbering, "Financial and monetary policy of Great Britain", *Quarterly journal of economics* xxxviii (1924), p. 227.
- (5) J.W. Angell, *Theory of International Prices*, 1926, p. 478.
- (6) David Ricardo, *High price of bullion*, appendix to 4th ed. Works, p. 293.
- (7) John Hill, *An inquiry into the causes of the present high price of Gold bullion in England*, 1810, pp. 8—9.
- (8) Henry Parnell, *The Principles of Currency and Exchange*, 1805, p. 77. *Observations upon the State of Currency in Ireland and upon the Course of Exchange between Dublin and London*, 1804, p. 37.
- (9) W. Huskisson, *Ibid.*, pp. 53—54.

む す び

反地金論者によれば、為替相場の不利が銀行券を減価せしめたのであり、又、為替相場の不利が金地金を高価ならしめ、それが銀行券に反映したのであって、その逆ではないという。それは、一八一九年のポンド平価復帰の際に、銀行券が増大したにもかかわらず、平価にもどったという決定的史実にあらわれていると主張するのである。「減価」という問題は、地金論者のみならず、反地金論者の多くが認めていた言葉である。しかし、銀行券が減価したとকাশないとかという事実が、両者の論争の焦点であったように一般に考えられているが、むしろ

地金論争におけるハスキッソンの立場

地金論争におけるハスキッソンの立場

ろ、何が銀行券を減価せしめたかということ、すなわち、投機的要因のゆえか、銀行券の過剰発行のゆえか、地金の騰貴ゆえか、銀行券の単なる固有の質的低下か、等の問題と物価との関連における因果の究明が両者の討論の要点であつたと思われる。従つて又、減価の問題の答えは、減価という言葉をいかに定義するかにかかつてゐるであらう。地金論者の一人が皮肉にものべた如く、「金で計つた紙幣価格の減少が減価であるかどうか、あるいはそれに等しいかどうかは、『取引所横町』で論じられるにふさわしい用語上の問題である」⁽¹⁾かもしれない。又減価した通貨を過剰発行した通貨と定義することは、疑わしい意味の一つの言葉を他に入れ代えることかもしれない。地金論者たちにとっては、多国に比べて、イギリスの物価が相対的に高いこと、平価以下のスターリング為替の下落は、減価の証であるとしたのであるが、こうした地金論者の立場は、ボイドによってよく表わされている。リカアドオは、イギリスの物価が減価しているという唯一の吟味は、他の条件を等しいとして不換紙幣下の物価と、兌換下での物価との比較にあると考えたが、同じ貨幣本位制度下のイギリスと他国の同一商品の相對価格の比較によつて吟味され得るとは、物価指数の知識をもたぬ彼にとつて暗示さえも出来なかつた。反地金論者によれば、減価の基準に、紙幣と金価値のみの比較では不充分であつて、他の商品、衣類穀物等の物価に変化がなければ、通貨はもとの水準にとどまつてゐるので減価してゐない。従つて、金と紙幣の比較から減価を説明するリカアドオ等の使つた減価の言葉の意味は、大衆のそれと異なるというのである。

シンクレヤーは、前述の冊子に於て、「ハスキッソンの書物をわづか最初の一九頁読み通すことによつて、ハスキッソンの理論が、政治経済科学における進歩によつて、是認された原理と一致していないことが分つた」とのべてゐる。⁽²⁾しかし、それは、シンクレヤーの言いすぎであらう。マルサスは「少くともビットの弟子として、

實際的政治家として生れたハスキッソンの權威は、當時の事態の眞理解明に大いに役立つたであらうし、理論に広い幅をあたえ、混乱した通貨制度におそれをいだいている人々を、静めるに役立つであらう」とのべているが、事實、読み通してみても、彼の言葉で語られた地金論者の主張と善意が、報告書の理解に、當時多分に役立つたであらうと推察出来る。

ただ、前述ふれて来たように、諸所修正を必要とする所もあらうし、又、反地金論者の側から見れば、少しも新しさのない説明であつたにちがいない。リカドオの秀麗な、技巧的な文章とちがつて、未整理と思われる箇所が多くて、読者を混乱させる点はたしかにあらう。しかし、リカドオに追隨せず、独自の地金主義的主張を発表したことは、地金論争開花のいしずえとなつたといえよう。

リカドオならびに地金主義者の考えと一般に考えられている通説と、時には接し、時には離れているハスキッソンの以上の思考は、地金論争を複雑ならしめた一つの証こでもあり、事實は、両者の原理を、時に応じて必要としたということではなからうか。

それは、地金論者、反地金論者の意見の中、それぞれ説明の相違や、意見の相異があつたことは、當時の両主義が、時代の流れによつてある時は眞理であり、ある時は一方的であつた証拠であつて、どの時点、どの期間をとらえての主張であるかを讀みとることこそ、その著者への理解であると思う。ハスキッソンは、一八一〇年第一版を出版して以来、七版を重ねても、何ら訂正していないところを見ると、銀行制限を頂点としての物価騰貴、外国為替下落、地金騰貴の事象のみみて結論したことが伺われる。その後期のデフレ期を通して、減価の説明をなしたなら、果してこの書のような純貨幣數量説的結論が出たかどうか疑問であらう。

地金論争におけるハンスキッソンの立場

- (1) Sir Philip Francis, *Reflections on the abundance of paper in circulation*, 2d. ed., 1810, p. 10.
- (2) J. Sinclalr, *Ibid.*, p. 54.
- (3) T. R. Malthus, *Ibid.*, p. 82.

附記 本稿作成に当り、メంగా―文庫閲覧の御便宜を計って下さった一橋大学図書館職員の方々に厚く御礼申し上げます。